

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	21世紀の社会を担うに必要な、自律の精神、実践を伴う行動力、創造性豊かな人間性の育成を目指す。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) 3年間の高校生活で「健やかな体」と「確かな学力」を培い、卒業時には「自分を変えることができた」と実感できる生徒。	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) 「連携型中高一貫教育」や「デュアル・システム」を始めとする地域と連携した学びを通じた体験と実践を伴う探究的な学びを推進する。	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) 部活動、生徒会活動やボランティア活動に積極的に参加しリーダーシップを発揮することで「自分を変えよう」という向上心が強い生徒。

3 評価する領域・分野	◇教育課程・学習指導	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・本校生徒、体験入学参加中学生が本校に期待する1番は「学習が苦手な生徒に対する基礎・基本の指導」である。 ・保護者からも「習熟度別授業」や「少人数授業」に肯定的な評価を貰っている。 	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇基礎学力の定着及び主体的な学習態度の育成 ◇学習効果を高める指導法の研究 ◇新学習指導要領への移行	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科及び各学年との連携 ・カリキュラム委員会 ・補助教材選定委員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路支援部との連携 ・教科書選定委員会
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1)生徒の実態に合った授業を目指し、生徒自らが学ぶ姿勢を身につけられるような学習指導 (2)授業公開週間を設け、授業計画や内容・指導方法について、教員間による授業研究を通じたの改善 (3)個別のニーズや学校課題に対応した効果的なカリキュラムの作成	(1) 考査における欠点者数、生徒による授業評価 (2) 生徒による授業評価、公開授業週間における参観者評価 (3) 学校運営協議会等の評価	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
<ul style="list-style-type: none"> ・1年の数学Iと英コミュIにおいて、全クラス(51人)を習熟度別に4クラスに分割指導。 ・特別進学クラスを設け、2年次より別カリキュラムで学習指導。3年次では選択により1, 2名でも授業を行う。 ・1年に2回の授業公開週間を実施しながら、生徒に合った授業のあり方を考える。 	① 職員全体で組織的に取り組めたか。 ② 生徒の学力は向上したか。 ③ 生徒が自己の進路希望をかなえられたか。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D
12 成果課題	総合評価	
○習熟度別指導・少人数指導を充実させることで個々の生徒への対応を深めることができた。 ▲ノート学習の廃止により、家庭学習(特に考査前)がほとんどおこなわれていない。一人でも学習できる手段を最初から教えていかなければならない。 ○1学年は独自で「自主勉ノート」を行ったからか、2・3年生に比べて成績不振者が少ない結果となった。「ノート学習」の復活も考えたほうがよい。	A (B) C D	
13 来年度に向けての改善方策案		
<ul style="list-style-type: none"> ・授業公開週間に実施する生徒による授業アンケート(6月・11月)を参考に、より分かりやすい授業が実施できるように工夫する。 ・学習内容の定着が遅い生徒に対しては、特に個人指導をきめ細かく実施する「寄り添い指導」をさらに続ける。 ・進学希望者の学力を伸ばすため関係職員連絡会を定期的に設け、家庭学習時間の確保とその充実を図る。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月15日

【意見・要望・評価等】

- ・一度廃止されたノート学習を1年生が再開した結果、実施していない2、3年生より基礎的な学力が不足する生徒が減少したことは喜ばしいことであるが、一律にノートのページ数を課するのではなく、個々の発達障害を持つ生徒には別個に適切な学習法を提示してほしい。
- ・新しい表彰の善行賞は、自己肯定感の低い若者が多い中とても良い賞であり、また矢車賞の副賞としてノートを作成するなど積極的な取組が行われている。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	21世紀の社会を担うのに必要な、自律の精神、実践を伴う行動力、創造性豊かな人間性の育成		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
	3年間の高校生活で「健やかな体」と「確かな学力」を培い、卒業時には「自分を変えることができた」と実感できる生徒。	「連携型中高一貫教育」や「デュアル・システム」を始めとする地域と連携した学びを通じた体験と実践を伴う探究的な学びを推進する。	部活動、生徒会活動やボランティア活動に積極的に参加しリーダーシップを発揮することで「自分を変えよう」という向上心が強い生徒。

3 評価する領域・分野	◇生徒指導（生徒指導・教育相談）		
4 現状の分析	○教育相談担当が中心となりが個々の生徒に対して適切な指導を行っている。 ▲授業や家庭学習への指導・支援をとおして1人ひとりの能力に応じた指導や高校生としてのマナーや社会規範を身に付けさせるための指導が不十分である。		
5 学校の抱える課題	・あいさつ・身だしなみ・言葉遣いなど社会人として必要不可欠なマナーを身につけるための指導の在り方 ・いじめや差別を許さず、厳しく対応することや生徒個々に対して適切な指導方法		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇基本的生活習慣の確立を目指す。 ◇生徒理解に努め、生徒に寄り添った支援を行う。 ◇家庭と学校とが一体となった生徒支援に努める。		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 全体指導・個人指導を通して基本的な生活習慣、望ましい生活態度を確立する支援 (2) 生徒に寄り添い、信頼、愛情を基盤とする支援 (3) 保護者懇談、三者懇談だけでなく日頃から家庭と連携を密にとる支援	(1) 月別出欠・遅刻数統計 (2) 学校評価アンケート、心のアンケート、いじめアンケート、迷惑調査及び困り事のアンケートおよび各アンケート後の聴き取り (3) 学校運営協議会の評価、学校評価アンケート		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
・欠席・遅刻・早退の統計や授業の取組などの情報を共有し、早期に改善するように努めている。 ・問題として表れてきた事案に対し、教育相談的な立場や視点で迅速に対応している。 ・些細なことでも家庭に連絡をこまめに取り、家庭との連携を図っている。	① 月別出欠・遅刻統計の推移や昨年度との比較 ② 事案やアンケートの結果や聴取および支援 ③ 学校から発信する情報に対するフィードバック	A (B) C D A (B) C D A (B) C D	
12 成果 課題	○「心のアンケート」や担任との個人面談で心身の不調や困りごとや不安のある生徒を迅速に掌握し対応ができ、家庭との連携も取ることができた。 ○あいさつ指導や身だしなみ指導、授業態度評価指導を通して、改善に結びつけられる生徒が増加した。 ▲心身の不調から欠席、遅刻をする生徒が多い。安易な理由による遅刻も多い状況にある。 ▲高校生としてのマナーや社会規範を守る意識が希薄な生徒に対しての指導方法が難しい状況にある。		総合評価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案	・全校集会や学年集会等で高校生としてのマナーやルールを守る目的や意義を明確に伝えたことを日常生活の中で指導徹底するために、あいさつ指導、身だしなみ指導、授業態度評価指導を生徒との対話を重視して行い、取組みの経過および結果等について学校全体で共有しながら進めていく。 ・MSL活動や生徒会行事を活性化させていくことにより積極的な生徒支援につなげていく。		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月15日

【意見・要望・評価等】

- ・デュアル成果発表会で発表の生徒の姿も良く、聞く側も私語なく聞いていた。先生方がよく育ててみえると思った。身だしなみについても指導の成果が出ている。
- ・八百津高校の少人数授業や、様々な自己有用感を感じさせる取組はまさに積極的な生徒指導であり、自ら考え生きていく力を育んでいただきたい。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	21世紀の社会を担うのに必要な、自律の精神、実践を伴う行動力、創造性豊かな人間性の育成		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) 3年間の高校生活で「健やかな体」と「確かな学力」を培い、卒業時には「自分を変えることができた」と実感できる生徒。	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) 「連携型中高一貫教育」や「デュアル・システム」を始めとする地域と連携した学びを通じた体験と実践を伴う探究的な学びを推進する。	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) 部活動、生徒会活動やボランティア活動に積極的に参加しリーダーシップを発揮することで「自分を変えよう」という向上心が強い生徒。

3 評価する領域・分野	◇進路支援		
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望実現のための支援の充実 ・進路決定に資するガイダンスの充実 ・キャリア教育の充実 		
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇「総合的な探究の時間」を活用して各種の進路ガイダンスを実施し進路決定への意識を高めていく。 ◇進路支援の立場から、社会人としての規律やマナーの順守、時間や期限を守ること、挨拶ができることの必要性を訴えていく。 ◇今年度中に求人票を電子管理できるようにする。		
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・地域創生キャリアプランナーの配置 ・進路支援部と学年・分掌との連携 ・外部機関との連携 		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 生徒の進路実現に向けた進学支援（補習・個別指導）と就職支援（求人確保・社会人教育等）の充実 (2) 将来をイメージしやすいガイダンスを実施し、広い視野と具体的な将来像を持って進路決定をする意識を高める支援	(1)学校評価アンケート 外部模試・進路先の結果 (2)学校評価アンケート 生徒による各種アンケート 振り返りシート		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・企業訪問等を通じた、積極的な求人要請 ・進路支援部による2・3年生全員との個人面談 ・進路ガイダンス、上級学校・企業見学の実施 ・基礎力診断テスト、進研模試の実施 ・「聴講や調査 → まとめ → 発表」の実施 	①求人数、模擬テストの結果 ②進路支援室の来室状況 ③進学・就職状況 ④生徒の取り組み状況、作成物の内容	A (B) C D A (B) C D A (B) C D A (B) C D	
12 成果課題	○学年や他の分掌との情報共有を図ることができ、学校全員体制で3年生の進路支援に取り組むことができ、就職は1次で全員内定を頂けた。 ○地域創生キャリアプランナーを活用した求人の活動、生徒への進路支援が個別によくできた。キャリアプランナーへの生徒や企業の信頼は厚かった。 ○現2年生より、求人票をスマホ等で閲覧できるよう電子管理化した。 ▲進学も就職も受け身の生徒が増えた。ICT機器を活用し、自ら進路情報を得られるよう指導をする必要がある。		総合評価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・外部模試を積極的に受験させ、全国における自分の学力を認識し、学習に向かわせる。 ・生徒の進路意識を高めるためにガイダンスは有効であり、計画的に実施していく。特に外部の方に来ていただいたり先輩の話を聞いたりする形式は生徒への浸透度が高く継続する。 ・電子化した求人票を活用し、早期から企業を調べる習慣を身につけさせ、企業と生徒のミスマッチを防ぐ。 ・進路情報を、HP等を用いて積極的に発信し、八百津高校の魅力を中学生に伝える努力が必要である。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月15日

【意見・要望・評価等】

- ・キャリアプランナーによる積極的な人間関係作りと適切な助言は信頼と安心を生み出し、就職指導を円滑化している。
- ・ICT機器を用いた求人票閲覧システムの構築の他、求人票の読み方を教員が学ぶ職員研修の実施はすばらしい。今後も真に必要な研修は実施してほしい。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1 学校教育目標	21世紀の社会を担うのに必要な、自律の精神、実践を伴う行動力、創造性豊かな人間性の育成		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
	3年間の高校生活で「健やかな体」と「確かな学力」を培い、卒業時には「自分を変えることができた」と実感できる生徒。	「連携型中高一貫教育」や「デュアル・システム」を始めとする地域と連携した学びを通じた体験と実践を伴う探究的な学びを推進する。	部活動、生徒会活動やボランティア活動に積極的に参加しリーダーシップを発揮することで「自分を変えよう」という向上心が強い生徒。

3 評価する領域・分野	◇連携型中高一貫教育		
4 現状の分析	・学校は、地元中学との中高一貫教育を通して、地域に貢献する人材を育成し、町の活性化に寄与している」との質問に対し、「よくあてはまる」「あてはまる」の評価は生徒72%（前年比同数値）、保護者74%（前年比+2）である。否定的な評価は生徒7%（前年比+1）、保護者3%（前年比+1）であり、連携した学校間の交流事業がほぼ予定通り実施できたことで、昨年度とほぼ同数値となったと考えられる。「わからない」という評価が生徒で21%、保護者で23%があり、連携中学校からの出身生徒が減少し、他の市町からの入学者の増加が要因と考えられる		
5 学校の抱える課題	◇「6年間を通して育てる」「地域から学び、地域に貢献する人材の育成」を目標に取り組み、学力の定着と豊かな人間性の育成を目指す。		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・可茂地区連携型中高一貫教育校長会議 ・可茂地区連携型中高一貫教育コーディネーター会議		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 組織相互の有機的な連携 (2) 中高全職員研修と授業交流の充実 (3) 町民と学校関係者向け広報活動	(1) 組織が効率よく機能したか (2) 重点目標の確認と授業交流の充実 (3) 町民、保護者の意識の向上		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
(1) 校長会議、コーディネーター会議、評価委員会の連携強化と充実 (2) 校報「いま八百津高校では」での広報活動 (3) 6年間を見通した交流授業の実施とチャレンジテストファイルの活用 (4) 中高でのキャリア教育の取組を交流しながらの「6年間を通した課題」の研究	(1) 組織が効率よく機能し、中高連携がより推進されたか。 (2) 町民及び学校関係者への広報活動が図れたか。 (3) 6年間を見通した教育実践 (4) 中高のキャリア教育の交流	A (B) C D A (B) C D A (B) C D A (B) C D	
12 成果・課題	○八百津中学校との交流授業、チャレンジテストファイルの確認や夏の実力養成講座、一日体験入学、カヌー体験（八百津東部中）、出前授業（八百津東部中）など連携2中学との行事の多くが予定通り実施でき中高連携の効果がみられた。 ○実務を担うコーディネーター会議を開催することができ、中高で連絡を取り合い行事を円滑に実施することができた。 ▲チャレンジテストの趣旨を説明するための出前講座の実施など、八百津町の中学生の基礎学力向上への取組について昨年度に比べてより積極的に行ってきたが、本校への志望者数は微増にとどまっている。		
13 来年度に向けての改善方策案	・中高一貫教育の成果（進路実績や就職実績）を地域や中学校に広め、町民や中学生とその保護者、高校生とその保護者の理解を深める取組を検討する。 ・既存の取組みや行事にとらわれず、新しい形での連携型中高一貫教育の形を模索していく。		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月15日

【意見・要望・評価等】

- ・今年度は令和2年以前の取組の多くが実施できたのは喜ばしい。来年度は今年以上により良い取組みが実施できるようにその方法と内容の工夫をお願いしたい。
- ・最近少くない数の中学校の卒業生が通信制に進学している。連携型中高一貫教育のように周囲との良好な関係の中で、自分自身を見つめなおす機会があるというのはおそらく通信制ではない魅力であり、その良さを中学生が理解するような取組みを期待したい。

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

1	学校教育目標	21世紀の社会を担うのに必要な、自律の精神、実践を伴う行動力、創造性豊かな人間性の育成		
2	スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP)	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)
		3年間の高校生活で「健やかな体」と「確かな学力」を培い、卒業時には「自分を変えることができた」と実感できる生徒。	「連携型中高一貫教育」や「デュアル・システム」を始めとする地域と連携した学びを通じた体験と実践を伴う探究的な学びを推進する。	部活動、生徒会活動やボランティア活動に積極的に参加しリーダーシップを発揮することで「自分を変えよう」という向上心が強い生徒。
3	評価する領域・分野	◇デュアルシステム「企業実習」、「企業実習基礎」		
4	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	・「企業実習」の実施や本校が地域の企業と連携して人材育成をおこなっている点について今年も評価されている。		
5	今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇「企業実習」受入協力企業の確保と拡大 ◇生徒、保護者への周知 ◇実習参加希望生徒の適正な選考と的確な事前指導 ◇実習生徒への的確な事前及び事後指導		
6	重点目標を達成するための校内における組織体制	・デュアルシステム担当者会議 ・「企業実習」受入企業との連携		
7	目標の達成に必要な具体的な取組		8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
		(1) 実習が惰性にならないよう常に意識喚起と目的の確認をする。 (2) 協力企業との日常的で密な情報交換をする。 (3) 1年学年団への資料提供、生徒向けガイダンスの実施 (4) 参加生徒への事前指導、受け入れ企業との面談の実施 (5) 「企業実習基礎」に外部講師を積極的に活用する。	(1) 参加希望生徒に対応できる企業・事業所を確保できたか。 (2) 実習先企業との日常的な情報交換ができているか。 (3) 実習希望生徒の数は確保できたか。 (4) 実習に向けて生徒の意識は高まっているか。実習生のケア、フォローはできているか。 (5) 「企業実習基礎」の内容が系統性をもって構成できたか。	
9	取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
・実習日は職員が巡回し、実習先企業との連携を密にしている。 ・実習日ごとに日誌を点検し面談を実施 ・「企業実習基礎」への外部講師の導入 ・地域創生キャリアプランナーの活用		①協力企業の数、実習生の数 ②実習生との面談、実習日誌、レポート ③実習の進捗状況	Ⓐ B C D A Ⓑ C D Ⓐ B C D	
12	成果 課題	○生徒は実習を通して、働くこと、職業の選択について深く考えられるようになってきている。 ○このプログラムに興味を持ってもらった企業からの問い合わせが続いている。 ・インターンシップに対する社会の関心の高さを実感した。 ○協力企業の実習に対する理解や巡回者とのコミュニケーションは良好である。 ▲実習に向かう生徒の意識にバラつきがあり、学校での指導の中で実習に対する連帯感を高めることはできなかった。 ▲「日誌」の記入内容が、その日を振り返り、学んだことや考えたことを具体的に記入するものになかなかならず、日誌の意味を生徒に十分に浸透させられなかった。		総合評価 A Ⓑ C D
13	来年度に向けての改善方策案 ・これからも継続して実施できるように、協力企業とプログラムの運営に関して検証を行う。 ・「企業実習基礎」で学んだことを生かす場を増やす。			

II 学校関係者評価

実施年月日：令和6年2月15日

【意見・要望・評価等】

- ・デュアルシステムを通して、コミュニケーション能力や自分から仕事を探す積極的な姿勢などが確実に身につけていることがわかりました。
- ・デュアルシステムを経験することは自分の壁を乗り越えるエネルギーとなる。これからの1年間の成長が楽しみである。